飛耳長目

学校教育で大切にすべきもの

宇部市立万倉小学校長　藤岡邦夫

「松下村塾」の塾帳の表紙に「飛耳長目」というタイトルがつけられていたそうだが、「森信三先生研究会」の会誌の名前も同じく「飛耳長目」だと言うことを、最近知って驚いた。今年度は、森信三先生が提唱された職場再建の三原則、「時を守り、場を清め、礼を尽くす」を学校経営の根幹にすえていたからだ。

学校生活をより充実していくために、全校でこの三原則を合言葉にしてきた。時間を守り、生活する場をきれいにし、礼儀正しくすることは、自分たちの生活に潤いを与えるだけでなく、社会に出るために最低限、身に付けておかなければならないことである。なぜなら、自分自身が高まることはもちろんだが、相手を尊重し、お互いが良い気分になり、信頼関係も深まるからだ。

森信三先生は、「しつけの三原則」も提唱されている。すなわち、一、朝のあいさつをする子に。二、「はい」とはっきり返事できる子に。三、席を立ったら必ずいすを入れ、はきものを脱いだら必ずそろえる子に。この三つである。はきものをそろえることについて言えば、今年度は、藤本幸邦老師が作られた「はきものをそろえると心もそろう」という詩を校内に掲示して実践している。

これからの学校教育は、「型の教育」の大切さ、伝統のすばらしさを再認識し、実践することではないかと思う。

よく、個性重視と言われるが、「型のある人が型を破るから型破りなのであって、型のない人が新しいことをやっても、それは形無しである。」と言われるように、先達が苦労して築き上げた「型」、伝統を大切にすることから、個性が生まれるのではないか。

個性というものは、自由であれば育つというものではなく、むしろ、会津藩の「什の掟」ではないが、いけないことはいけないと、理屈抜きで指導するところから生まれたものこそ、真の個性というべきではないか。

自分が小学校一年生のころ、嘘をついた時など、担任の先生は「天知る。地知る。己が知る。」と言って厳しく叱った。これは、「四知」（後漢書）の言葉だが、半世紀以上も前のことを、今でも鮮明に思い起こす。昔の先生は、本気でこんなことを言って、子どもを諭していたのだ。

今、学校教育は、ものすごい速さで変化している。こういうときこそ、「脚下照顧」の精神を忘れず、先人の叡智、良き伝統といったものを大切にすべきではないだろうか。

豊かな自然に囲まれて

下関市立蓋井小学校長　片山伸二

朝の三時。深い眠りから呼び覚ますようなサイレンが、島中に響き渡る。海の男たち十数名が、第二十協栄丸（通称・大敷）に乗って、定置網漁へ出陣の合図である。島の周囲は豊かな水産資源に恵まれ、新鮮な魚貝類が水揚げされている。約一時間後定置網漁の船が港に着くと、北九州の市場へ捕れたての新鮮な魚を送ろうと、荷捌き所では老若男女関係なく、協力して運搬船へとたくさんの魚を箱詰めしている。蓋井島は、夜明けを待たずに一日が始まっている。

本校は、本州最西端にある毘沙ノ鼻（下関市吉母）からおよそ六キロメートル程沖合の響灘にぽっかりと浮かぶ、人口百人足らずの蓋井島唯一の小学校である。赴任した当初は全国でも珍しい児童一人であったが、今は児童数は三倍にふくれあがり、とはいっても全校児童三名で、極小規模校には変わりないのではあるが…。明治時代初頭に島に小学校が創設されたことから、島民の教育にかける思いや願いは、高いものがある。その熱い思いが今も受け継がれ、蓋井島・蓋井小学校合同で開催する「蓋井大運動会」は、島全体のコミュニティーが集結する一大イベントになっている。運動会では、島の人口と同じ程の人が集まり、子どもたちの演技に盛大な声援を送ってくださったり、様々な競技に参加してくださったりしている。さらに、毎年開催する学芸会では、婦人会や青年会、長寿会といった島のあらゆる団体が参加し、学校行事というより島の演芸会に子どもたちが参加しているようでもある。そういった行事等の中、子どもたちは温かい島民の思いをしっかりと受け止め、登下校の際には、学校での出来事や自分が頑張ったことを出会う人に楽しそうに話している。少人数ではあるが、コミュニケーションを育み、そして社会性を育む第一歩として、あいさつ運動とともに推し進めている。

ところで蓋井島という名前は、「神功皇后が三韓征伐の際にこの島に立ち寄り、水の池と火の池の二つの井戸を蓋で覆った」ことに由来している。また、国の「島の宝百景」にも選ばれた伝統行事「山ノ神神事」は、七年に一度催されている。

自然に恵まれたこの蓋井島で、島の方々との温かいふれあいの中、豊かな心の育成と、伝統的行事をしっかりと継承していこうとする心の育成と、さらには小規模校の利点を生かした「学力向上」に向けた取組を、しっかりとした基盤作りとともに継承して行きたいと考えている。